

主 題	日課にとらわれない、自由な生活
副 題	その人らしい生活を求めて

私をほっといて!		研究期間	5 4 ヶ月
----------	--	------	--------

事業所	社会福祉法人 アゼリヤ会 特別養護老人ホーム みやま大樹の苑		
発表者：田野倉 君枝（たのくら きみえ）		アドバイザー：新館 明	
共同研究者：			

電 話	042-651-0161	E-mail	
F A X	042-651-0136	U R L	http://www.azeriya.or.jp/taijyu

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	八王子市美山町という自然豊かな場所にあります。昭和63年4月開設された113床2フロアの特別養護老人ホームです。敷地内には同法人アゼリヤ会の養護老人ホーム、救護施設、デイホームが併設されています。法人理念である、弱い立場の側に立った援助を、入居者一人ひとりに合わせた、日課にとらわれないケアを目指して、多職種協働で日々取り組んでおります。
------------------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

対象者：Aさん 女性 年齢91歳
平成22年3月入居され、4年半になる。

現病：アルツハイマー型認知症
（平成18年より発症）

歩行：独歩 食事：自力摂取 排泄：自立

- ・入居当初、帰宅願望強く昼夜問わず、居室のカーテンをしめ、電気を消して寝ている事多く同室者を追い払い、他入居者とのトラブルがあった。
- ・入居して、食事を残すことが多く体重が減少してしまった。
- ・職員や他入居者とのコミュニケーションを図ることが少なく、馴染めないでいた。
- ・クラブやリハビリ、行事があると落ち着きがなくなり、疲れるまで歩き回り、転倒につながるケースもあった。
- ・表情が陰しく笑顔があまりなかった。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

- ・ご家族の情報では、趣味は殆どなく、寡黙な方であり、人見知りだった。ただ、昔から、型に縛られる生活よりも、自由にマイペースに生活をされていた。
- ・施設の日課にとらわれず、在宅での生活を参考に、自由に安心して生活できるよう、ご本人のペースに合わせた支援を行った。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ① 他入居者とのトラブルをさけ、落ちついた環境で休んでいただくため、4人部屋から個室にお部屋を変更した。変更後は、お部屋を覚えられない様子あったが、その都度自室に案内をした。
 - ② 食事がしっかり摂れるように、嗜好の把握を行った。
- ・ご家族に、在宅での食事の様子や嗜好などを伺ったところ、好き嫌いなく全量摂取していた。但し、義歯を使用してからは、噛みきれないも

のは残されていたとのこと。

⇒好き嫌いだけで食事を残しているわけではないことが分かったため、何を残しているか、チェックし記録に残した。また、魚は解してお出しすると摂取することが増えた。

⇒食事は無理に摂取を勧めず、摂れない時は間食として好きな餡子のお菓子を提供した。

⇒野菜ジュースなどが好きであったため毎日飲めるよう提供した

③ 職員、他入居者と交流が図れるよう努めた

- ・まずは、職員が積極的に挨拶とハイタッチを行い、スキンシップとコミュニケーションを図るよう努めた。長時間のお話は好まなかったため、無理にお話することはせず、ご本人のペースに合わせて声掛けをした。
- ・次に、職員が間に入り他入居者も交え、自己紹介や故郷のお話をする機会をつくった。特に、故郷のお話は盛り上がった。また、ジャンケンや茶話会を行い、入居者同士の交流を図った。
- ・故郷では、よく里芋煮会を開催し、楽しんでいたとのこと、苑内のクラブ活動で、里芋煮会を開催して楽しんでいただいた。

《4. 取り組みの結果と考察》

① 半年後には、しっかりお部屋の場所を認識でき、日中お部屋で休むことが減りフロアで過ごす時間が増えた。

② 在宅時の嗜好を施設でもできるだけ対応したことで、在宅での生活スタイルにより近づけられた。食事環境に慣れたことで、摂取量が増え、体重も少しずつ戻ってきた。

③ 職員の名前を覚えることは難しかったが、顔を覚えてくれた様子で、次第に笑顔も増えた。以前と違い、他入居者と一緒に過ごすことが安心に繋がっている様子で、例えば、食堂から他入居者が、フロアに戻ってこない、と、迎えにきたり、他入居者の飲み終わったコップなどを片付けてくれたりと、手伝いもしてくれるようになった。

以前は、フロアで風船バレーボールなどが始まると、落ち着きなくフロアを歩きまわって

転んでしまうこともあったが、今では周りの入居者と一緒に、自ら参加することが増えてきた。大きな行事がある時も、同様に落ち着きなくなっていたが、今では無理なく参加することが増えている。

《5. まとめ、結論》

みやま大樹の苑での生活は、入居して約4年半が経ちます。入居当時の事を振り返れば、環境の変化についていけず、周りの入居者と馴染めずにいきました。そのため、Aさんにとっての「その人らしい生活」を考え対応を検討、実行してきました。その結果、今では表情がとても穏やかで落ち着いて過ごせています。

入居当時のご家族の面会后、必ず帰宅願望が出てしまっていたが、今では「ここにいるから、あんた帰えりなさい」とご家族に話すことがあるそうです。一見、クラブや行事に積極的に参加することが良いと考えがちになってしまいましたが、Aさんらしく生活できる事を中心に考えた結果、一概にクラブなどに参加することだけが全てではなく、その人が穏やかに、安心して、自由に、毎日を生活できることが、一番大切なことだと考えます。

また、無理にコミュニケーションを図るのではなく、ご本人にとって、いかに心地良い距離感や言葉かけができるかが、とても大切な事だと痛感し、職員間で学ぶことができました。

ご家族からは、「今では、みなさんとも仲良くできて、家に帰りたいたとも言わない。表情も穏やかで、今が一番落ち着いているんでしょうね。」と仰って下さいます。そのお言葉は、職員にとって何よりの評価だと受け止めています。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究を発表するにあたって、事前にご本人とご家族に承諾をいただいた。また、内容を精査し、個人情報については削除や修正等の配慮を行った。